

水戸黄門漫遊記白書

鶴ヶ島人情話



脚本・宮塚美男

水戸黄門漫遊記 鶴ヶ島宿情話

◎ 登場人物

水戸黄門……先の副將軍（江戸・日本橋の呉服問屋の隠居を名乗る）	小沼
助さん……黄門の家臣（気が短く、お人良し）	佐々木
格さん……黄門の家臣（温厚で柔軟な考え）	高橋
風車の弥七……探索密偵	青木
おゆみ……茶屋の娘	石川
おつる……おゆみの母（昔かたぎの頑固者だが涙もろい）	石田
ひろ吉……おゆみの兄（生真面目で一本気）	関
赤鼻の権蔵親分……宿場を取り仕切るヤクザで十手持ち（強欲でズル賢い）	細貝
捨作……権蔵の子分（喧嘩っ早い）	滝沢
常造……権蔵の子分（調子よく陰険）	木村
政吉……権蔵の子分（情け知らず）	田島
茶屋の客A……旅人	高柳
茶屋の客B……旅人	石黒

第一幕

茶屋

(「だんご」「源兵衛茶屋」のノボリが見える。)

おゆみが赤鼻一家に因縁をつけられている。

捨作

「やい、やい、やい！ 何べん同じことを言わせるんでー」

おゆみ

「ですから、兄さんが帰ってくるまで、もう三日だけ待ってくださいと…」

常造

「あのひろ吉が十両の金をこさえて来るんだと？そんな事、真に受けていいんかい」

政吉

「払うもん払わなけりや、この店をたたんで出ていくか、さもなけりやー、おゆみ、てめえが岡場所にでも身を売るしか手はねえだろうよ、ねえ、親分」

赤鼻の親分

「仕方あんべえなあ、いくら情け深けえこの権蔵様でも、さすがに仏の顔も三度っていうからな！」

常造

「いままで面倒見てきた恩をあだで返す気か そんな不人情な話はねえだろうねえ、親分」

赤鼻の親分

「まあ、俺も鬼じゃあねえ、明日の昼までは待ってやろう。それが刻限だ。」

「それ以上は待てねえな。母親のおつるにもそう伝えときな。おゆみ」

「まあ、おまえがお代官様の妾になるというのなら、話は別だがな。」

「ひっ・ひっ・ひっ」(いやらしい笑い方)

おゆみ

「そんな、妾なんて嫌です。」

(きつぱりという。)

「後生だから、明日の昼までとは言わず、三日だけ待ってはもらえませんか。赤鼻の親分！」

捨作

「何だと、何が赤鼻の親分だ。権蔵親分が一番気にしていることを、このアマ！」

赤鼻の親分

「おめえが繰り返すことはねえだろうよ」

子分三人

「そだね」

赤鼻の親分

「明日の昼頃また来ることにしよう。さあ、野郎ども行くぞ！」

政吉

「おっ覚えてやがれ！」

③

赤鼻の親分たちが下手から来た水戸黄門一行とすれ違い、捨作が黄門と肩がぶつ

かる。

捨作 「やい、どこを見て歩いてやがる！ このスットコドッコイ！」

助さん 「何だと、このお方を…」（間を置かず、）

水戸黄門 「まあまあ助さん、お止めなされ。どこぞのお方が存ぜぬが、この年寄りに免じて、この場合は、ご勘弁願いたい。はいこの通り」（黄門、頭を下げる。）

捨作 「気を付けやがれってんで！」

常造 「変な爺いだぜ」

政吉 「嫌な爺いだぜ」

赤鼻一家が去り、黄門が茶店に気づく。

水戸黄門 「丁度よいところに茶店が。どうです、しばし身体を休めることといたしまし
ようか」

助さん 「丁度小腹もすいてきたところですね。」

水戸黄門 「団子でも注文しようとしよう。」

格さん 「おい娘さん、茶と団子を頼むぞ。団子は三十本程な」

おゆみ 「は、はい、只今」（元氣なく）

黄門一行、入間川の景色を愛でているが、黄門は娘の所作を不審に思う。

アドリブ ポート生きてんじゃねーをいう。

茶屋の客 A 「鶴ヶ島ってはじめてきたけどいいところね」

④ 茶屋の客 B なんでもも四年かんだちがとにやる 雷 電池の雨乞いが有名だそうよ。今度は再来年だ

って」。

茶屋の客 A

「へー、オリンピックと同年にやるのね。見に行きたいわ。」

茶屋の客 B

「一緒に行きましょうよ。楽しみだわ。」

おゆみが団子とお茶を持って出てくる。

おゆみ

「お待ちどうさまです」

水戸黄門

「娘さん、失礼だが、名はなんと申す？」

おゆみ

「ゆみと申します」

水戸黄門

「おゆみさんか、良い名じゃのう。ところで先刻より気になっておったのじゃが、さきほどの怪しいやからと何かいさかいでもあったのでは？」

おゆみ

「じつは、……」

水戸黄門

「遠慮なく申してみなさい。この爺いがお役に立てることもあるかもしれんし」

おゆみ

「とんでもございませぬ。見ず知らずのお方に、そのような……」

助さん

「」のおお方は、越後のちりめん問屋の御隠居様でな、お節介が道楽なんだよ。訳を話して」らん」

おゆみ

「赤鼻の親分が……いえ、いえ、」（おゆみは店の奥に行ってしまう。）

【舞台暗転】

第二幕

茶屋の奥座敷

おつるが一人布団に寝ている。

おゆみ

「おっかさん、おかゆができたわよ」（おゆみがおつるを起こす。）

（おゆみがおつるにかゆを渡す。）

おつる

「いつもすまないねえ、ありがとね」

（おつるがかゆをすすする。）

「この宿場の『安心と安全』を守ってきたお父つあんが赤鼻一家の企みで命を落とさなければ、おゆみにこんな苦勞をさせずにすんだものを……メソメソ、メソメン」

おゆみ 「それは言わない約束でしょう」

おつる 「そうだったね、すまないねえ、おゆみ」

(咳き込むおつる、背中をさするおゆみ)

おゆみ 「謝ってばかり」(物音がして、おゆみ立ち上がって、木戸に近寄る。)

おゆみ 「お兄ちゃん、お兄ちゃんなのね」(戸の外にひろ吉。目頭を押さえて思いつめた顔で立っている。)(おゆみ、戸を開けてひろ吉を見つけ喜ぶ。)

おゆみ 「お兄ちゃん、やっぱりお兄ちゃんだったのね。さ、早く中に入って」
(中に入るひろ吉とおゆみ)

ひろ吉 「おっかさん、すまねえ」

「オイラ、江戸で頑張ったけど、借金の十兩に一兩程足らなかったんだ」

「それで板橋宿の賭場で増やそうとしたんだけど、逆に四兩すっちまたんだ」
「おっかさん、すまねえ」

おつる 「まったく、ばかな子だよ！博打なんかには手を出して。おゆみの心配顔を考えなかつたのかい」

ひろ吉 「ごめんよ、おゆみ」

おゆみ 「それもこれも、おとつつあんが、赤鼻一家のせいで死んじまったからだ。裏できつと悪代官とつながっているに違いないんだわ」

ひろ吉 「おとつつあんの作った源兵衛一家を再興したいけど、赤鼻の悪だくみにはかなわねえ……」

(ひろ吉むせび泣く。)

(物陰で風車の弥七が立ち聞きしている。腕組みして思案顔に)

【舞台暗転】

第三幕 茶屋

上手よりおつる親子の茶屋に赤鼻一家が肩をゆすって登場する。

捨作

「おやおや、ひろ吉さん、お帰りになったのかい？」

常造

「振込詐欺でもやって金ができたのかい、そいつあ良かったな。ねえ親分」

ひろ吉

「それが、今は半分の五両しかねーんだ」

「後の半分は必ず返すからしばらく待ってもらえねーだろうか」

政吉

「何い、後で返すだと。親分、どうしやしよう」

常造

「ふざけんじゃねー。ねえ親分。」

赤鼻の親分

「いちいちこつちを向いていうんじゃあねえ」

「おう、ひろ吉よ、この十手が待てねーっていつてるんだよ」

おつる

「そこを何とかお願い致します。権蔵親分さん」

赤鼻の親分

「おゆみが親孝行のためにお代官様のところに行くというなら考えるがな」

おゆみ

「絶対に嫌です。」

赤鼻の親分

「何だと、嫌だというなら、もう勘弁ならねえ。野郎どもこの店をぶっ壊しちゃまえ」

おゆみ

「そ、そんな無慈悲な…」

ひろ吉

「畜生！」（ひろ吉丸たん棒を振りかざす。）

水戸黄門

「お待ちなさい！。ひろ吉さんとやら。ここは、この年寄りに任せてはもらえんか。立ち向かうのも男だが、我慢するのも男ですぞ」

赤鼻の親分

「昨日の爺いたちではないか。構わねえ。まとめて畳んでしまえ」

赤鼻家と助さん、格さんのチャンバラが始まる。チャンバラの疑似音鳴り響き幕も揺れる。赤鼻一家が負ける。（

赤鼻の親分はゼイゼイしながら立っているが、子分三人は痛がりながら腰を下ろしている。）

助さん

「者ども、静まれい！この紋所が目に入らぬか」

（助さん印籠と間違えてスマホを出す。）

水戸黄門

「これ、助さん、こつちだ」

⑦

(水戸黄門があわてて印籠を出し、助さんに渡す。)
(助さん、見栄を張ってみんなに印籠を示す。)
(赤鼻一家、驚き、赤鼻親分も膝を合わせかしくまる。)

格さん

「ここにおわすお方をどなたと心得る。恐れ多くも、先の副將軍、水戸光圀公にあらせられるぞ。一同、頭が高い。控えおろう!」

赤鼻一家

「ははー」(一同ひれ伏す。)

水戸黄門

赤鼻鼻の権蔵とやら、この宿場を取り仕切っていた源兵衛一家をはかりごとで乗っ取ったうえに、代官に取りいるため、おゆみを妾にしようとした罪は許し難し。よって、縄をかけ、しかるべき所にて裁きを受けさせるものなり」

赤鼻の親分

(親分は後ずさりしながら)
「そ、そ、それはあんまりですぜ。借金を返してくれといっただけでー」

水戸黄門

「黙らっしゃい!この黄門の目は、節穴ではないぞ」
「代官とお前たちの悪だくみは全てこの弥七やしちによって、調べは済んでおる。たわけ者 めが!」

赤鼻一家

「ははー、恐れ入りました」

【舞台暗転】(赤鼻一家去る。)

おつる、ひろ吉、おゆみが並んで黄門一行を見送る。

おつる

「有難うございました。なんとお礼を申し上げてよいやら」

水戸黄門

「おつるとやら、良い医者差し向けるによって、養生いたせ」
「ひろ吉とおゆみは兄弟仲良く、家を再興し、この鶴ヶ島宿を街道一のよい宿場になるよう励むのじゃ。よいな」
「人生苦があれば楽があるというからの。かっ・かっ・かっ」

(水戸黄門のテーマがながれる。)

ひろ吉・おゆみ・おつる 「黄門さま、有難うございました」

(去っていく黄門たちに頭を下げる。)

終り

※ 今後の稽古日

- | | | |
|------------|---------|--------------|
| 十一月十四日(木) | 十九時～二時間 | 富士見市民センターの舞台 |
| 十一月二十一日(木) | 十九時～二時間 | 富士見市民センターの舞台 |
| 十二月五日(木) | 十九時～二時間 | 富士見市民センターの舞台 |
| 十二月十二日(木) | 十九時～二時間 | 富士見市民センターの舞台 |
| 十二月十四日(土) | 十四時～ | 南市民センターの舞台 |
| 十二月十五日(日) | 九時～ | 南市民センターの舞台 |